

# 三重県の自然災害伝承碑の分布と災害の特徴および地理院地図未掲載の災害伝承碑の紹介

発表者：三重県立松阪高等学校2年 山中琴羽 中西柚名 1年 清水綾乃

**【研究概要】** 地理院地図で三重県全域の自然災害伝承碑の分布を確認し、災害別に分類した。その結果、三重県の自然災害伝承碑の災害種別の特徴は、以下の通りであった。南部の熊野灘沿岸および志摩半島沿岸は地震による津波、北部伊勢湾岸は伊勢湾台風による高潮、内陸の伊賀地方は台風または豪雨による土砂災害・洪水、地震による地盤沈下が多くみられた。また、三重県中部は災害伝承碑がほとんどなく、空白地域となっている。そのうち宮川流域は、古来より洪水などの災害が多い地域で、堤防建設の際の人柱伝説「松井孫右衛門の碑」も知られている。そこで、宮川流域の災害の歴史の文献調査を行ない、江戸時代、明治時代以降で、洪水の深刻な人的被害の確認ができた地域（玉城町屋田地区）の文献調査、フィールドワーク（現地調査、玉城町役場および地元の古老よりの聞き取り調査）を行い、地理院地図に未掲載の災害伝承碑（慰霊碑）と治水遺構（水刳堤）を確認した。その災害伝承碑と治水遺構に関する災害の概要を報告するとともに、地域の活性化に向けた、災害伝承碑と治水遺構の活用を提案する。



図1 三重県の災害伝承碑の分布

**A：桑名市・三重郡・四日市市** この地域の災害伝承碑は主に伊勢湾台風によるものである。1959年9月の伊勢湾台風は、台風災害として明治以降最多の死者行方不明者数5,098名に及び、犠牲者の8割は高潮の発生によって愛知・三重の2県に集中した。

**B：鳥羽市・志摩市・度会郡** この地域の災害伝承碑は主に安政東南海地震による。1854年11月4日に東海地震、翌5日に南海地震が起き、伊豆から四国までの広範な地帯に死者数千名、倒壊家屋3万軒以上という被害が生じた。

**C：度会郡・尾鷲市・熊野市** この地域の災害伝承碑は主に昭和東南海地震によるものである。この地震は1944年12月7日に起き、マグニチュード7.9を観測し、死者1,223人の被害が生じた。

**D：紀宝町** この災害伝承碑は、2011年9月台風12号の大雨水害によるものである。

**E：伊賀市** この地域の自然災害伝承碑は主に大豪雨によるもので、近畿大水害の山津波と安政の伊賀上野地震についての被害を記している。

**F：名張市 G：伊勢市 H：多気郡**  
F・Gは伊勢湾台風、Hは2004年の台風21号による土石流・地滑りによる災害碑である。

## 【玉城町屋田地区の災害伝承碑の紹介に至るまで】

地理院地図には宮川流域の災害伝承碑が見当たらない。しかしながら宮川は様々な災害の記録が残されているので、宮川流域はまだ知られていない伝承碑があるのではなかろうかと考え資料を調査した。その際、偶然『玉城町寺院案内記』（非売品）の中に度会郡玉城町屋田地区（図1★印）の災害伝承碑を見つけた。その碑は明治18年7月の宮川の洪水の様子を記録したものだ。

## 【明治18年7月1日の天候】

図2は明治18年7月1日の天気図である。これを見ると、台風の中心が紀伊半島にあり勢力を保ち伊勢湾台風とよく似たコースで、来襲していることがわかる。夏の時期の台風なので雨量が多かったと予想される。この台風は大阪府淀川で大水害を引き起こしたほか、高知県、岐阜県、福井県などで災害を引き起こしている。

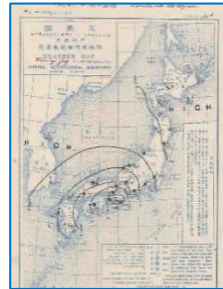


図2 7月1日の天気図

## 【明治18年水害の全国の被害状況】

大阪府淀川付近には、明治18年の水害による自然災害伝承碑で地理院地図に登録されているものは3つある。その碑には、上旬から続く降雨により淀川の水位が上昇し、さらに暴風雨の影響で広範囲にわたって堤防が決壊、2万6千戸以上が流失、約290人が亡くなったということが記されている。図3はそのうち枚方市のもので、市の指定文化財である。この水害は「国の治水政策を大きく転換せざるを得なくなった水害であった」とされる。（\*1）



図3 枚方市の災害伝承碑（地理院地図）

- \*1 市川紀一（土木史研究第18号）
- \*2 公文録（明治18年内務省）

## 【三重県の被害状況】

三重県令が内務卿・山県有朋宛に、災害復旧の上申書を提出した際の被害状況調査表によると、この水害の三重県での死者は44人で、そのうちの19人は度会郡（屋田）が占めており、三重県の各地区の中では犠牲者が最多であったことがわかる。この時、内務省より管轄分の被害額の6分の1として14,484円が災害復旧費として補助されている。（\*2）



図4 屋田の水害伝承碑

**【屋田地区の災害伝承碑の記録】** 文政4年（1821）戸数22戸、人口122人、馬6匹であった屋田村は、明治18年（1885）の大洪水で堤防240間（436竈）が決壊して壊滅的打撃をうけた。当時の惨状を書きとめた記念碑が、地区の薬師堂境内に建っている。土地の古老である山本勇さん（88歳）からお聞きしたことによると、昭和30年頃には堤防道路の上、決壊箇所にあったが、交通量の増加に伴い危険であるということから、昭和30年代後半頃に現在の位置に移されたということである。

伝承碑の文を引用すると、「明治十八年六月二十九日雨潦降越七月一日河水漲溢衝決堤防。」（1885年6月29日、大雨（長雨）が降り7月1日河の水が堤防を突き破った。）とある。また、『屋田村宮川堤防潰決之実地景況』には、「本月（7月）一日ノ強雨洪水八同村（屋田村）宮川一時二水嵩ミ、堤ヨリ一尺余上ヘ水越シ、同日午後三時頃」から30分にかけて堤防が決壊したとある。碑文には8戸20棟の建物が流され、死者19人と記録されている。また地元からの要請で堤防が9680円余の費用で、翌年3月に修復されたことも記載されている。



図5 百間バネではない

**【水制の遺構「百間バネ」について】** 百間バネは宮川の強い水の流れをはね除けるための石積みめの堤として宮川の洪水から尊い命を守るという願いを込めて築かれた。このような水制遺構は「水刳堤」という。築かれた時期は明治18年水害以降の近い時期と考えられるが資料がなくはっきりしない。図5は玉城町の「水辺の楽校」のパンフレットに記載されている百間バネの場所で撮影したものである。しかし、この場所は地元の山本勇さん話によると、百間バネではなく、本当の百間バネはこの写真よりもっと上流で、昭和20年代にはすでに土砂におおわれていたということである。また、山本さんが祖父から聞いた話によると実際の百間バネは、城の石垣のような立派なものだったという。図6は木曾川に残る水刳堤（岐阜県HPより）である。土砂を取り除けば、百間バネも、このような立派な遺構であると期待される。



図6 木曾川の水刳堤

**【まとめと提案】** 今回、地元の古老、山本勇さんに話を聞いた話、船で下って友達の家へ遊びに行った話など、宮川での昔の思い出を熱く語っていただき、屋田の人々にとって宮川がいかに大切な川なのか、並々ならぬ思い入れを感じた。しかし屋田地区は宮川の恩恵を受ける反面、「水」に悩まされる土地であった。例えば大雨が降れば伏流水から水があふれ、池のように水浸しになってしまう土地があったようだ。特に洪水による被害を減らすために造られた百間バネは、屋田の人々が「水」と戦ってきたことを物語っている。玉城町は、屋田地区に「自然体験・環境学習」を目的として「たまき水辺の楽校」という広場を整備している。今回、玉城町の辻村修一町長のお話も伺い、百間バネを治水歴史遺産として水害の教訓を伝えていこうというお考えもあることを知った。私たちは、屋田の災害伝承碑を地理院地図に登録していただき、百間バネとともに地域の歴史と防災について学ぶ場としても、この「たまき水辺の楽校」を整備していただくことを提案したい。



図7 「たまき水辺の楽校」パンフレットより（百間バネの位置が違い本当はもっと上流である）

主要参考文献 「玉城町史」（金子延夫） 「三重県・玉城町史」（玉城町） 公文録（明治18年内務省）